

北朝鮮における宗教国家の形成 前編

—大衆教化の技術的側面を中心に—

前編 目次

はじめに

一、教化の種類と方法

二、「物語教化」から「宗教教化」へ

三、「三胎子」から「首領福」へ

(一)「福をいただいた三つ子たち」—幸福の尖兵

(二)「首領福」と「人民福」—幸福観の奪取

古田博司

はじめに

九一年、ソ連からの原油輸入の減少は、北朝鮮経済に深刻な打撃を与えた。⁽¹⁾九二年と九三年の金日成の新年の辞は、石炭増産と石炭を運ぶ運輸、石炭をエネルギーとする電力の代替へと人民を駆り立てるものであった。すでに九〇年から始まっていた炭鉱労働への「進出」という名の挺身は一層拍車をかけ、大量の人力が事務などの軽労働から石炭採掘の重労働へと移されていった。

北朝鮮石油ショックは、速やかに経済全体へと波及していった。郡の経済活動は後退し、郡は外部からの運輸の道を絶たれて孤立化し、自給自足へと追い込まれた。その象徴ともいえるのが、九一年一月から始まる「鄭チュンシル運動」である。これは北朝鮮思想教化史から見れば、六七年以来の「忠誠」教化、八七年以来の「孝誠」教化の集大成とも呼ばれるべきものであり、「自己に高貴なる政治的生命を抱かせて下さったオボイ（親たる）首領様と党中央に対する無限の忠実性」が評価され、「党の望む忠臣・孝子の典型」として人民の手本となり、「革命的首領観」の確固たる者とされた一女性称揚に始まる運動であった。⁽²⁾女性は同年一二月製作の映画「孝女」⁽³⁾のモデルとなり、その徳行は全国に喧伝された。

しかしその徳行の内実は、経済的なものである。

党機関誌『労働新聞』九一年一月二二日付けによれば、二重労働英雄、鄭チュンシルは「本身革命課業である商業奉仕活動」（本業のノルマである商業活動）以外の生産活動で表彰されたことが明らかに示されている。女性は本

来商業部門の幹部であるにも拘わらず、過去一〇年間従業員たちと一二町歩の桑畑を造成し、五〇余トンの蚕を生産し、五〇余町歩の原料基地を確保し、数千トンの雑穀を収穫し、一万五千匹のビーバーと三百匹近くの黒銀ギツネと多くの家畜を育て、五百余トンの山菜を採取し、「郡内の人民生活向上に積極的に寄与した」という郡内自力更生（自給自足）の手法として称揚されたのであった。

以後、「鄭チュンシル運動」は「実効」の教化によつて全国に普及し、各地の「鄭チュンシル」たちが、党機関紙に報告された。運動開始から三年後、平安南道檜倉郡からは郡商業管理所の所長以下従業員たちが、一千トンの雑穀と四百トンの食肉、多くの蚕、乳汁、きのこを確保し、数百トンの木の実と山菜を採取し、郡内の住民の生活に大きく寄与したと報告された。⁽⁵⁾「自力更生」という名の自給自足経済は、明らかに採取経済をも含むものであった。

九四年一月九日、一〇日には、平壤で「鄭チュンシル運動先駆者大会」が開かれ、全国の「鄭チュンシル」たちが集まり、自らの郡・市経済に自分たちがいかに貢献したかが喧伝された。⁽⁶⁾しかしその実、報告者は商業部門や物資供給部門など流通の停滞によつて閑職に追い込まれた部門の幹部がほとんどであり、これに旅館や食堂、商店などのももとの閑職の責任者が加わっていた。つまりこの運動は、仕事のない者、なくなった者たちを生産と開墾、そして採取へと駆り立てるものであったと思われる。

九五年元日の『労働新聞』、新聞『朝鮮人民軍』、『労働青年』の三紙共同社説は、もはや臆すことなく郡の自給自足を「全ての郡で、自分の力で、郡内の人民の生活をさらに高めるための闘争を力強く繰り広げなければならない」と鼓吹し、「この地でさらに富強な祖国を建設し得る道は、ただただ自力更生しかない」と言い切ったのであった。

しかるに経済の停滞性を、思想教化の急進性で不断に乗り切るのが朝鮮の伝統である。同社説によれば、「鄭チュ

ンシル運動先駆者」たちは党に喜びを捧げる、「真の忠臣」なのであり、全ての幹部たちは党の「仁徳政治」を具現するために手足とならねばならず、人民は「首領様の福を享受する大いなる矜持と幸福を胸深く暖め、(逝去した)親たる首領様に尽くしきれなかった忠誠と孝誠を、敬愛する最高司令官、金正日同志を奉じる道で高く発揮しなければならぬ」のであった。⁽¹⁾

本稿では、彼らの言葉を借りれば、「信心と樂觀」に溢れた社会を作り出すその思想教化技術に着目し、近年における北朝鮮大衆扇動の展開を宗教国家の形成という側面から概観することにした。

「はじめに」注

(1) 藤井新「日朝関係正常化交渉の経過と展望」『東亜』一九九五年四月号、通巻三三四号、一六頁。

(2) 本紙記者、チョ・ウォンヂェ「このようなイルクン(幹部)が人民の真の服務者だ」前川郡商業管理所所長、二重労働英雄、鄭チュンシル同志についての話」『労働新聞』一九九一年一月二二日、一〜三面。

(3) 張チュンヒョン・白ピョンパル「真の忠臣、人民の忠僕についての感動深い絵巻物―芸術映画『孝女』(一・二部)について」『労働新聞』一九九二年一月一日。本映画の内容は、『朝鮮映画』一九九二年五号(累計二二七号)、六号(累計二二八号)参照。「孝女」というのは、金日成首領に孝誠を尽くす女性という意味である。なお、張と白との連名

記事は後に、九二年度版『朝鮮映画年鑑』(一九九四年二月二五日刊。二四九〜五三頁)に転載されるが、新聞と年鑑では文中の金正日の「お言葉」引用が換えられている。新聞の方は、「党と首領に対する忠誠と孝誠は、人生観になってこそ、一層確固たるものになります。人は一日を生きようとも堂々と誇りをもって生きなければなりません」であるが、年鑑の方は、「社会政治的生命は社会と集団の要求を実現するための闘争で輝かされる。社会と集団の要求は党と首領によ

つて代表されるだけに、党と首領に忠実で、党の路線と政策を貫徹するため英雄的に闘争するとき、社会政治的生命を永遠に輝かせていくことができる」となっている。教化の力点が、「忠孝一心」から「永生」へと転じたとも考えられる。

(4) 「実効」の教化とは、事例をあげれば次のようなものである。

「信念と意志の化身李仁模同志が書いた文『我々には首領福があります』に対する読報（筆者後述）と実効会も組織させ、首領福と我々の尊厳、我々の幸福」という題目を与え、軍人たちの中で討論も繰り広げさせた」（ドン・ギユン「首領福を一時も忘れない―朝鮮人民軍、安ピョンセン同志所属部隊軍人たち」『労働新聞』一九九四年四月二十四日、一面）。

「抗日遊撃隊式に背囊を背負い、市・郡・工場・企業所に降りて行った宣伝扇動部イルクン（その部門の活動員）たちは、……方式上学（筆者後述）では、血の岩の前で作った自作詩発表会、芸術映画『前哨戦』に対する実効会、作業の合間に簡単な階級教養資料である『カウベルに宿った怨恨』をもつて行われる扇動、映画主題歌でもつて仇に対する敵愾心を呼び起こす芸術扇動も行った」（特派記者、崔イルホ「革命教養、階級教養を強化―江原道党委員会で」『労働新聞』一九九四年九月二十四日、一面）。

また九二年版『朝鮮語大辞典』によれば、実効会とは、「主に文学芸術作品を通じて）思想精神的に学んだ内容を作業と生活に具現し、実地に効力を表わすようにさせるため、決意を固める集会」とある。事例を含めて言えば、集会参加者が、映画・文学・逸話中あるいは実在の忠孝ぬきんでた非凡な人物のように生きようと自己表明し合い、互いの決意を確かめあう集団教化の方法である。我が国戦時中の、爆弾三勇士の称揚のようなものを集会で行うと思えばわかりやすいであろう。なお同辞典によれば、事例中の教化方法の「読報」とは、「新聞を始めとする様々な教化資料を皆に知らせるために声を出して読むこと、またはそのような宣伝活動」であり、「方式上学」とは、「単単位で模範を創造し、それを手本にし、イルクンたちに政治事業方法や方式、先進技術の創案や導入などを教え、彼らの政治実務水準を高めてやることに、全ての単位でその模範を手本にさせる方式」である。

(5) 本紙記者、チョ・ウォンジェ「檜倉郡の『鄭チュンシル』たち―檜倉郡商業管理所所長、朴ギサン同志と従業員た

ち」『労働新聞』一九九四年一月一九日、四面。

(6) 「鄭チュンシル運動先駆者大会で行われた討論」『労働新聞』一九九四年二月一〇日、一一日、三〜六面。

(7) 「偉大な党の領導を高く奉じ、新年の進軍を力強く速めて行こう」『労働新聞』一九九五年一月一日、一〜二面。

一、教化の種類と方法

北朝鮮では教化という意味で「教養」という語を用いる。今この「教養」を北朝鮮の学者による思想教化研究文献、『思想教養に対する主体的理論』にあるものから羅列すれば、おおよそ次のような種類が挙げられる。

革命教養、共産主義教養、階級教養、集団主義教養、社会主義愛国主義教養、労働愛精神教養、党政策教養、忠実性教養、共産主義道徳教養、主体思想教養、唯一思想教養、革命伝統教養、我が民族第一主義教養⁽¹⁾。

後六者が北朝鮮独自の特徴ある教化であり、忠実性教養以下六者を概括すれば、「金日成首領に忠実であることを、共産主義革命家の道徳とし、彼の創始した主体思想を唯一の思想として奉じ、革命の道を開拓した金日成首領と抗日パルチザン戦士たちの革命の伝統を代を継いで金正日とともに護り、首領をいただく我が民族が世界一幸せであることを思え」ということになる。金日成・金正日に忠実であれという命題がこれらの教化の出発点であることは明らかであり、この「忠実性教養」のように教化目的がそれ以上、最小単位に遡れない根本の教化を、すでに羅列した「一般的教化」に対比し、仮に「根本命題教化」と名付けておくことにする。

根本命題教化としては、北朝鮮の諸文献を概観すると、忠実性教養、恩徳教養、偉大性教養、肯定感教化教養、対比

教養、反證教養などの教化が挙げられる。以下、簡単に解説しておくこととする。

忠実性教養とは、「黨員と勤労者を主体型の共産主義革命家として育てるために、彼らに党と首領に対する限りない忠実性を身につけさせる教養。党と首領に対する忠実性教養は党思想事業において、常にしっかりと把握しなければならぬ重要な任務⁽²⁾」である。事例を引くと次のようなものである。

大学初級党委員会は革命逸話《肥やしと実》を始めとする親愛なる指導者同志の崇高な風貌を示す革命逸話に対する実効会を何回か行つた。実効会に参加した大学のイルクン（幹部⁽³⁾）たちと教員たちは……党と首領に無限に忠実なる忠臣、孝子としてしっかりと備えることを決意した。

大学党委員会はイルクンたちと教員たちが固めた決意が輝かしく実践されるよう彼らのなかに入り、親愛なる指導者同志の意図を適宜知らせ、教授教養事業で革新を巻き起こす方法を討論した。親愛なる指導者同志が意図なかり望まれるように生き、働こうというイルクンと教員たちの熱意は非常に高まった。大学の全ての学部のイルクンたちと教員たちは、……直観教育、実物教育を強化するための方法を集体的に見つけ出し、実践に具現している。彼らは、……指導者同志を中心に従い高く奉るよう忠実性教養を様々な形式と方法で積極的に深化させた。⁽⁴⁾

つぎの恩徳教養とは、「黨員たちと勤労者たちが、首領と党の大いなる恩徳を胸熱く感じ、忠誠で報いる決意を固めさせるための教化。恩徳教養は偉大な首領様と親愛なる指導者同志に対する革命的義理が変わることなく心中とどめさせるための重要な思想教養の「一つ」⁽⁵⁾」である。これ以上の贅言は要しないであろう。この教化は内容的に独立しているというよりは、忠実性教養のバリエーションに近い。恩徳をこうむつたから忠誠、忠実性で答えねばならないと

する教化である。

偉大性教養とは、明確な定義が見いだせないが事例を引くと次のようなものである。

道党委員会はまた親愛なる指導者同志の偉大な風貌を示す徳性実記題目を選定し、道内の党組織と勤労団体組織で学習もし、発表会も広く組織させた。そして《親愛なる指導者同志の天才的知略と無比の胆力》という題目で講演事業を進め、《主体工業の新たな歴史を輝かせる卓越した領導》を始めとする親愛なる指導者同志の革命活動を取録した二〇余題目の映画文献を市、郡に下し、学習させた。

道党委員会は親愛なる指導者同志が道を訪れ残された史蹟資料を新たに展示し、参観および見学事業を計画的に進めるように組織作業を組み、党員たちと勤労者たちが不滅の領導業績を胸深くとどめるようにしている。

偉大性教養を深化させるために道党委員会は、扇動員、五号担当扇動員たちに解説談話、扇動資料をもって党員たちと勤労者たちのなかで積極的に解説宣伝をするようにさせ、長編小説《叡智》などの親愛なる指導者同志を描いた文学芸術作品と《労働新聞》に掲載された革命逸話をもって宣伝扇動活動を活発に繰り広げさせた。⁽⁶⁾

つまり金日成・金正日の徳性実記（人徳で民衆に恩恵を施した記録）学習発表会、兩人を称揚する講演会や映画会、現地指導の際に残っていた身の回りの物の展示会、小説や新聞に載った逸話などを利用し、兩人がいかに偉大であるかを教え込む教化方法のことと思われる。

肯定感化教養は、「肯定的なものにより否定的なものに打ち勝ち、模範的な事例をもって群衆を感化させることは、人々を教化する我が党の方法である」（金日成著作集一五卷三〇頁）。肯定的な事実と模範的な事例をもって群衆を感化させ、人々を真の共産主義の人間に教化する我が党の大衆教化方法の一つ。隠れた英雄たちの模範を見習う運動

は、我が党の肯定感化教養方針を具現した大衆的思想改造運動である」というのだが、抽象的すぎるので、これも具
体例を引いて内容を確定したいと思う。

去る七月二〇日、国立民族芸術団初級党秘書、金ミョンギュは、舞台運営と照明師の池デヨンス同志と差向いで
話した。

「深く考えて下した決心なんでしょうね！」

「オボイ（親たる）首領さまが生前経済建設で新しい高揚を巻き起こすことについて、そのように強調されまし
たが……。わたしは安州地区炭鋳連合企業所に進出し、オボイ首領さまの生前のお志しを花咲かせることに、微
力ながらもことごとくを捧げたいと思います」……

池デヨンス同志が事務室を出て行つてから、初級党秘書同志は肯定資料綴じをめぐつた。

劇場で一日の仕事を終え、毎夕三大革命展示館、統一通り、住宅建設場で三年六ヶ月もの間、人知れず忠誠の珠
の汗を捧げた。模範的な青年解説員……。池デヨンス同志についての肯定資料を再び見る初級党秘書同志はうな
づいた。彼の人となり（と）が知れたからである。

文中の「進出」とは、後述するが、自ら進んで危険度の高い重労働の職場に挺身することである。肯定感化教養と
は、職場のノルマ以外の仕事を別の場所で行い、その奇特な行為を群衆に模範として示すことにより、群衆を教化す
る方法である。人知れず密かに行うことが、「隠れた英雄」としての建て前になっているのだが、実は職場に報告さ
れて「肯定資料」として記録され、党員になる際や昇進の際の実績資料になるのである。

つぎに対比教養、反證教養などの教化があるが、この二つは内容的に類似である。対比教養とは「隆盛発展する北

半部の現実と退廃的な南朝鮮の現実を通じての対比教養⁽⁹⁾という用例にあるように、自分たちを「優」に、他者を「劣」にあらかじめ措定して自分たちの優越性を喧伝することである。反證教養とは、「否定的なことの本質と制約性、害毒性などを具体的事実や論拠を挙げて説明することにより、自然に肯定的なことの正当性を認識させるための教養⁽¹⁰⁾」とあり、肯定感化教養に似た定義が与えられているが、実例では次のように対比教養に近く、対比教養とセツトで展開されることが多い。

初級党委員会ではこのような反證資料による教化をさらに深化させるため、皆が分かるように、社会主義が挫折した国で米価から住居に至るまで、生活で苦痛をなめているという数字的な資料を総合し、壁掛け図表(コル・クリム)を作つて示した。このような反證資料による教養事業は、人々に偉大な主体思想を具現した人民大衆心の我々(ウリ)式社会主義が、世の中で最も優越した社会制度であるという認識をさらに堅持させた。……

初級党委員会では、我が国の自立的民族経済の優越性を認識させる作業も、南朝鮮の石鹼の泡のような隷属経済と対比し、実感をもたせて行つた。⁽¹¹⁾

つまり、あらかじめ措定した自分たちの「優越性」を確証するために、他者の否定的な部分を取り上げ、自分たちの「劣」なる部分に対する不断の覚醒に対抗して、これを打ち消すことである。

以上、教化概念上の分類としての、「一般的教化」の核をなす「根本命題教化」について概観したが、北朝鮮の教化活動はこれらを基本として、このほかに教科内容を豊かに膨らます「物語教化」とでも呼ぶべきものが、時の思潮から次々に採り上げられて展開されるのが常である。

今日まで行われたそれを概観すれば、金日成神話、抗日パルチザン伝説、金正日神話、白頭山聖地化、⁽¹²⁾ 口号木スロ

ーガン⁽¹³⁾、社会政治的生命体と永生⁽¹⁴⁾、忠誠と孝誠⁽¹⁵⁾、忠孝一心、軍民一致、首領福と人民福、共産主義美風、檀君民族と金日成民族など、朝鮮の伝統文化と儒教文化、卜占の伝統や風水信仰、檀君教まで動員され、朝鮮の幻想的な才能はぐくんだ、一幅の絵巻のような「物語教化」が次々と繰り返られるのである。

第一章注

(1) 準博士、全テソン著『思想教養に対する主体的理論』一九九一年九月二〇日刊、社会科学出版社。一五九頁〜一九四頁参照。

(2) 『朝鮮語大辞典』第二巻、一九九二年三月二〇日刊、社会科学出版社。また忠実性教養については、次のような定義もある。「党と首領のための忠実性教養は、人民大衆を党と首領を真心から高く奉る忠誠の隊伍に造り上げる作業である。ここには、人民大衆を忠孝一心の結晶体に造り、偉大な首領さまが開拓された革命偉業を最後まで継承し発展させようとなさる親愛なる指導者同志の確固不動の意志が盛り込まれている」(博士、金テッキュ「偉大な領導者を奉り天地の果てまで―我が革命の主体を強化発展させるための領導」『労働新聞』一九九四年八月三〇日、二面)

(3) 「イルクン」という語彙は、北朝鮮では三様の使われ方をする。まず「イルクンたちと勤労者たち」、あるいは「大学イルクンたちと教員たち」のように並列して使われる場合には、幹部の意味である。「扇動部イルクン」や「商店イルクン」のように、部門や部署の後に付される場合にはその職場の成員のことで、「扇動部員」「商店員」などという訳がふさわしい。周囲の状況が何もなく、ただ「イルクンたち」と記されている場合には、漠然と労働者、勤労者一般を指している場合が多い。

(4) 平壤外国語大学初級党委員会秘書、李ワング「真の忠臣、この上ない孝子に」『労働新聞』一九九四年一〇月三日、三面。

- (5) 前掲『朝鮮語大辞典』第二巻。
- (6) 特派記者、金キドゥ「党の偉大性宣伝をさらに実のあるものに—平安北道で」、『労働新聞』一九九四年一〇月二日、三面。
- (7) 『朝鮮語大辞典』第一巻、一九九二年三月一〇日刊、社会科学出版社。
- (8) 本紙記者、李ウンシル「我々の時代の奇特な青年たち—国立民族芸術団の池ジョンソ同志とその婚約者平壤総合印刷工場の黄ジョンファ同志」、『労働新聞』一九九四年九月三〇日、四面。
- (9) 前掲『朝鮮語大辞典』第一巻。
- (10) 同右。
- (11) 郭チョン「反證資料をもつて—朝陽炭鉱初級党委員会の事業から」、『労働新聞』一九九三年一月二六日、二面。
- (12) 鐸木昌之「北朝鮮—伝統と社会主義の共鳴」一九九二年一月一〇日刊、東京大学出版会。第五章「体制神話—星・太陽・白頭山・血脈・地脈・精気」参照。
- (13) 鐸木昌之「首領制国家における神話—『口号木』と『光明星伝説』を中心に」、アジアから考える「4」、『社会と国家』、一九九四年三月二〇日刊、東京大学出版会、参照。
- (14) 鐸木前掲書、第四章参照。ならびに古田博司「北朝鮮における儒教の伝統と主体思想の展開—金正日」七・一五談話』を中心に、『下関市立大学論集』第三四巻第三号（一九九一年一月）、同「忠誠と孝誠—北朝鮮イデオロギー教化史上の二大画期点、一九六七、一九八七」、『下関市立大学論集』第三六巻第一・二合併号（一九九二年九月）参照。
- (15) 古田前掲（一九九二年）論文参照。

二、「物語教化」から「宗教教化」へ

北朝鮮の「物語教化」の宣伝扇動は、あるキーワードの出現を契機として、「宗教教化」の宣教へと次第に移行していったというのが、筆者の北朝鮮思想教化史に関する基本的な認識である。では、そのキーワードとは何かといえば、それは「永生」（永遠に生きる）という語彙であり、その語彙の繰り広げるロゴスであると思われる。

「永生」という語彙がロゴスをもつて北朝鮮の文献に登場するのは、管見では一九七四年九月号の党機関誌『勤労者』の無記名論文に遡る。

政治的生命は人々に永生できる生を与える生命である。

人の肉体的生命には限りがあるが、祖国と人民、革命のために価値あらんと捧げられた革命家たちの政治的生命はとこしえに輝くものである。社会主義、共産主義偉業実現のための栄えある革命闘争に残された革命家たちの高貴な業績と革命精神、彼らの政治的生命は、人々の心に永遠に生き続ける。（以上、九頁）

真に首領様が抱かせて下さった政治的生命は、我が人民に永生する生と生活の真の誇りをいだけせて下さる、その何にも比べようのない貴重な生命であり、我が祖国と人民の輝く勝利と無窮の繁栄の担保となる、最も力ある生命である。（以上、一二頁）⁽¹⁾

ここには八七年に発表される金正日「社会政治的生命体」論の萌芽がある。そこでは首領を脳髄とし、党を中枢とし、人民を身体とする三位一体の有機体国家が観念され、人々はそこに永生すると説かれるのであるが、ここでは未

だ永生する世界は外界になく、「人々の心」の中という段階にとどまっている。

「永生」という言葉は、仙丹起源の「長生」ほどはポピュラーではないが、元来中国仏教や道教には古くからある言葉であり、朝鮮語にもそのまま輸入されて使われていたが、この語の意味に辞書上の変化が見られるようになるのは北朝鮮では前年の七三年からのことである。七三年度版『朝鮮文化語辞典』（社会科学出版社）では、この語の用例として「我々は生きてもひたすら首領様のために生き、死んでもひたすら首領様のために永生の道を歩まん！」というように表され、死の境を「永生」の語でばかすことが行われている。しかし北朝鮮では「永生」世界はまだ外界に形成されていない。これが形成されるのは金正日の後継者としての地位が不動のものとなった八〇年代のことである。

金正日は八七年に「主体思想教養で提起されるいくつかの問題について」を発表した。ここで初めて金日成によって与えられたとされる永生の政治的生命という魂は、「社会政治的生命体」という現世の「永生」世界に軟着陸したのである。従って金正日の語調も、次のように神憑り、宗教がかかる。

朝鮮の全ての共産主義革命家は、父なる首領様から永生の政治的生命をいただき、首領様の愛とお心遣いの御手の差し伸べの下に育ちました。誠に我が首領様は我々みなの大偉大な師であり、政治的生命の父であらせられます。それ故偉大な首領様に対する我々黨員と勤労者の忠実性は曇りなく澄み渡ったものであり、絶対的、無条件的なものなのです。

この「政治的生命」と生物としての「肉体的生命」が、各々儒教における「魂」と「魄」のアナロジーであり、前者が後者よりも価値が高いとされ、後者だけでは禽獣に近いとする言説であることは、筆者は他の論文で繰り返し述べ

べてきたので、ここではこの側面からは追求しない。ここでは儒教的言説によって、北朝鮮の「永生」世界が開かれたのだという点のみを押さえて先へと進みたい。

金正日は翌年の論文では次のように述べている。

英雄的に生き闘争するということは、人間に於て最も高貴な社会政治的生命を輝かし、永生する道です。

人の持つ肉体的生命と社会政治的生命はともに貴重です。肉体的生命が健全であれば社会政治的活動を一層うまくやって行くことができます。しかし社会的存在である人間において、最も貴重な生命は社会政治的生命です。

人々はその社会的生命体に結合し、社会政治的生命を帯びることによってのみ自分の運命を自主的に開拓して行くことができ、世界と自分の運命の主人として人間的に生きることが出来ます。個人の肉体的生命は尽きても彼が帯びた社会政治的生命は社会的生命体と共に永生することになります。⁽⁴⁾

以上の金正日の「永生」観をもとに、宣伝扇動部の「永生」教化が、この後華やかに繰り広げられていった。

八年、七月二日の『労働新聞』では、北朝鮮が得意とする教化方法であるが、「我々だけでなく、外国人もそう言っている」という言説が早々と登場する。あるガーナ人の投稿詩が掲載された。

偉大な首領金日成同志は／永生するオボイ（親）

恩恵の解放者／鋼鉄の霊将／我らは歌うよ

四月の賛歌を／御方の偉大性を／おお、偉大な太陽⁽⁵⁾よ

そして、この教化の目的が露呈する。この教化は、金日成の死後を睨み、金日成の死の垣根を取りはずし、金日成を永生する存在として観念させることにある。第二には、革命伝統教養に則り、「代を継いで」永生する生命を授け

る教祖を金正日へと移行させる処置である。それは次に挙げる事例で明らかになる。九〇年二月三〇日『労働新聞』掲載の一文である。

五〇歳を越えるまで果たせなかった私の胸中の念願まで察して下さった親愛なる指導者同志は、栄光ある朝鮮労働党員の榮譽を私にいだかしめ、子供たちも揃って党の隊列に押し立てて下さり、永生する政治的生命を身につけさせて下さいました。実に親愛なる指導者金正日同志こそ、私の家庭を暖かいみ胸に抱き育てて下さり、面倒を見て下さる政治的生命の恩人であり、慈愛のオボイ（親）であらせられます！⁽⁶⁾

北朝鮮は少なくとも八八年以来、宗教国家となつたとおそらく言い得るであろう。金日成は、永遠の生命を与える神格であり、社会政治的生命体という「永生」世界の主である。人民は金日成にいただいた政治的生命を現世において輝かすことができれば永生するのであり、さもなければ禽獣の生として漂泊する。政治的生命を現世において輝かすことの基準は、忠誠と孝誠である。ここには、現世の功績と過失を算出する、道教の「功過格」にも似た神格による業績評価がある。

そして以上のような宗教教化の準備の果てに、一九九四年七月八日、金日成首領は「無事」卒した。

翌日の『労働新聞』は、一面全面に金日成の顔絵を掲載し、「偉大な首領金日成同志は永生するであろう」と見出しを付けた。同一二日には、「偉大な首領金日成同志は永生不滅であろう——偉大な首領金日成同志の霊前に弔意を表する儀式、厳粛に挙行、朝鮮民主主義人民共和国国防委員会委員長で、朝鮮人民軍最高司令官であらせられる金正日同志が党と国家の指導幹部たちと共に偉大な首領金日成同志の霊前に深甚な哀悼の意を表された」と述べ、二面に一日の弔意式に出た金正日の写真を掲載した。

九月、十月は金日成の永生を知らせる様々な予兆が現れたとされた。他方この期間は、前章の事例に述べた「根本命題教化」が激しく行われていた時期でもある。激しい教化と繰り返される信仰告白の集会、慢性の睡眠不足の環境は、マインド・コントロールには最適な土壌であり、リフトンのいう「窒息の敵意」⁽⁷⁾は当時次のように掻き立てられていた。

農場初級党委員会ではまた、体験談を通じて、かつての祖国解放戦争（朝鮮戦争）の時期の階級のかたきどもが行った鬼畜のごとき蛮行を、農場員たちにはつきりと知らしめることにより、彼らの階級的自覚を高めてやっている。一青年をさらによく導いてやらねばと思つた農場初級党委員会秘書崔ボクファン同志は、ある日村で戦争の時期に敵たちの蛮行を目撃した一老人を連れて、ハドン部落に安置された愛国者たちの墓を訪れた。そこで青年に、階級のかたきが彼の父母をどの様に虐殺したかを老人に語らせた。小さな部屋に閉じ込め、鉄棒で殴つたが駄目で、最後に愛国者たちを集团的に火をかけて殺した階級のかたきの蛮行は、真にいまますます歯を嚙⁽⁸⁾んだ。

金日成永生の瑞兆記事はこの前日から始まつている。

平城市では秋夕の日に、今年の花がまた咲いた。

二〇日朝、駅前洞に位置する平安南道高麗病院の庭の七、八年生の杏の木一株に、四〇余のつぼみの花が一斉に咲く前例の無い神秘の現象が現れた。……

「秋夕の日に限りなく恋しい首領さまを追慕して、杏の花が花盛りだ。偉大な首領さまが、花のなかに永生なさせられてほしいと思う人民の気持ちをこめて、再び咲いた杏の花だ。本当に我が首領さまは、山川草木さえも忘

れ得ぬ、天の氣に乗ってお生まれになった絶世の偉人であらせられる」⁽⁹⁾

と、人々は口々に語ったという。一〇月にはいると、金親子を象徴する瑞兆が現れたことを写真入りで党機関紙が伝えた。平壤の主体思想塔の上空に双つの虹がかかったのである。言うまでもなく、一つは金日成を象徴し、いま一つは金正日を象徴する⁽¹⁰⁾。金日成死去百日目の追慕会報告が行われたことを告げる一七日の機関紙にも、永生の瑞兆記事が掲載された。

平壤市中区城東安洞八三人民班の一家庭で、二四年間育てている千年蘭に花が咲く稀なる現象が現れた。……両江ホテルでも春に咲く花がまた咲いた。両江ホテル入口に植えた葉びろの丁子にオボイ首領さま逝去百日を目前に花がぱつと咲いた。……偉大な首領さまは生前、葉びろの丁子の木をたいへん愛していらつしやつた。……オボイ首領さまを恋しがり咲いた葉びろ丁子の木を見て、人々は静かに目頭を拭う。……

両江ホテル初級党秘書金キョンエ同志は語る。「植物学的に考察すると余りに珍しい事実は、我が首領さまの偉大性に対する伝説的な現実と見なければなりません」⁽¹¹⁾

さし当たり、物語がどれほどの効果をもつて民衆に浸透しているかという問題は我々の関心事ではない。より重要なことは、このような宗教教化を許す土壤が北朝鮮に造成されてから、すでに何事もなく七年を経てしまつてゐるといふ峻厳たる事実である。

九五年五月には、これも北朝鮮の得意とする教化方法であるが、「南の人民は我々よりもさらに切実にそう思つてゐる」という言説で、金日成の永生が語られた。

南の地の同胞は……変わらぬ敬慕の情を表示してきた。

「金日成主席がこの世を去られたとは考えられない。なぜなら金日成主席は天が下した偉人であらせられるためだ。昔から天人（ハヌル・サラム）は永生するという。しかし金日成主席のような偉人は天の太陽が永遠であるごとくに永生するものだ」……

南の地の人々にとっては、偉大な首領金日成同志は即ち敬愛する金正日將軍さまであらせられ、敬愛する金正日將軍さまは即ち偉大な首領さまであらせられる。⁽¹²⁾

文中の「金日成イコール金正日」教化は、金日成の死後、八月一四日に唐突に現れて、以後単発的に登場する教化題目である。永生する金日成と現生する金正日をいかに重ね合わせるか、これは教化題目としては困難なものに属するであろうが、物語教化としてはその展開の期待される教化であろう。

第二章注

(1) 無記名「首領様がいだかせて下さった高貴な政治的生命を永遠に固守し輝かせていこう」『勤労者』第九号通巻三八九号、一九七四年九月刊。ちなみに当原文八頁に出てくる「harukwi sarado」（一日を生きようとも）という語句は、金正日の「御言葉引用」によく見られるものである。

(2) 金正日「主体思想教育で提起されるいくつかの問題について」（朝鮮労働党中央委員会責任幹部たちとの談話、一九八六年七月一五日）『勤労者』第七号通巻五四三号、一九八七年七月刊、一七頁。

(3) 古田（前章注）前掲論文。ならびに古田「主体思想とは何か——北朝鮮における儒教の伝統と現代」『文化会議』通巻二六六号、一九九一年八月号参照。

金日成は、「人間が社会政治的生命をもたず無為徒食し、ただ生命を維持するだけでは、動物と変わるところがありません」（農業生産に一大転換をもたらすために——黄海南道、平壤市、平安南道、平安北道農業イルクン協議会で行った演

説』『金日成著作集』第二八巻、朝鮮語版一九八四年、七八〜九頁」と語つたとされる。また金正日は、「社会と集団がどのようになるうとも、我が身の安楽のみを追求するならば、そのような生活は本質的に動物の生活と変わりありません」

(金正日「皆が英雄的に生き、闘争しよう―朝鮮労働党中央委員会責任幹部たちとの会談、一九八八年五月一日」、『勤労者』第一一号通巻五五九号、一九八八年一月刊、八頁)と述べた。これらがいずれも儒教の言説であることは、次の『孟子』の一節から明らかである。

「人之有道也、飽食煖衣、逸居而無教、則近於禽獸」(人の道たるや、飽食煖衣し、逸居して教うることなければ、則ち禽獸に近し)『孟子』滕文公上篇。

ゆえに聖人はこれを憂えて司徒に命じ、五倫(父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信)を教えさせたとする有名な一節であり、金父子の頭にこれがイン・プットされていたということは、朝鮮の儒教教化の歴史の根深さを如実に物語るものである。

(4) 金正日「皆が英雄的に生き、闘争しよう」(朝鮮労働党中央委員会責任幹部たちとの会談、一九八八年五月一日)『勤労者』第一一号通巻五五九号、一九八八年一月刊、八頁。

(5) ガーナ人クワシガ・アグベコ「恩恵の太陽」『労働新聞』一九八八年七月二二日、二面。

(6) 「限りなく慈愛深いオポイであらせられる親愛なる指導者金正日同志に差し上げます」『労働新聞』一九九〇年二月三〇日、二面。

(7) Robert Jay Lifton, *Thought Reform and the Psychology of Totalism: A Study of "Brainwashing" in China*, New York, Norton Library, 1963, 411.

(8) 「階級的自覚を高めてやり―順安区域大陽共同農場初級党委員会」『労働新聞』一九九四年九月二四日、二面。

(9) 「人民の心をこめ、杏の花がふたたび咲いた―平壤九月二二日発、朝鮮中央通信」『労働新聞』一九九四年九月二三日、四面。

(10) 李ミョンナム「主体思想塔にかかった双つの虹」『労働新聞』一九九四年一〇月五日、四面。

(11) 本紙記者、李ウンシル「オボイ首領さまを恋しがり咲く花」『労働新聞』一九九四年一〇月一七日、六面。

(12) 本紙記者、李スンヒ「偉大な首領さまの統一遺訓を輝かしく実現するであろう」『労働新聞』一九九五年五月八日、
五面。

(13) 李ジョンテ「正論、偉大な領導者を奉り、天地の果てまで。太陽は高く昇っている」『労働新聞』一九九四年八月一
四日、三面。「金日成同志は金正日同志であらせられ、金正日同志は金日成同志であらせられる」とあるを参照。

三、「三胎子」から「首領福」へ

(1) 「福をいただいた三つ子たち」―幸福の尖兵

一九八九年二月二五日、金日成は朝鮮人民軍第二次社労青員大会に参席した九組の三胎子（三つ子）の軍人たちに親しく接見し、金正日、人民武力部長呉振宇、人民軍総参謀長崔光とともに記念撮影を行った。

偉大な首領様は、三胎子たちが今日のように堂々と成長し得たのは、我が党があり、我が国の社会主義制度があるからだとおっしゃりつつ、党の息子・娘のように常に祖国と人民のため献身的に服務せねばならないと教示なさった。⁽¹⁾

翌九〇年一月二一日、『労働新聞』は四面の一部分に、昨日「愛の揺籃の平壤産院」で百度目の三つ子が誕生したことを告げた。同記事は同産院で初めての三つ子が生まれたのは八〇年九月のことだと遡り記すが、この月の公表は

なかった。

翌二二日の新聞は百度目の三つ子誕生記事を、さらに大きく四面の上半分を使って掲載した。この間の事情を『福をいただいた三つ子たち』（金星青年出版社、九三年一月一日刊）は、次のように語っている。

激変する情勢の中でも秋毫の動揺もなく、真つ直ぐ勝利の一路に我が革命と建設を領導なされんと、真夜中の零時を遙かに過ぎてても執務室をお離れになれない親愛なる指導者同志は、編集の終わった一月二一日付労働新聞執筆案をご覧になったが、百度目の三つ子のニュースが何故無いのかと該当担当者にお尋ねになった。その担当者が新聞が既にみな編集されてしまったので入れられなかったと申し上げると、御方はそれなれば小さくとも紹介文を四面に載せ、後に再度大きく載せねばならぬとおっしゃった。（二二頁）

何故三つ子を称揚し、優遇するのか。意味の分からぬのは我々のみではない。幹部たちもそうであった。同書は金正日の意図がくみ取れない幹部たちを諸処に記述し、教化が困難であったことを率直に示している。結局金正日は、三つ子のうち一名のみを優遇する事後策へと後退したのであった。

親愛なる指導者同志は一九九二年三月、一部幹部たちが三つ子に対する観点を正しく立てられないことから、その生活の世話をすることを負担と見なして保育や教育事業を編成しないという事実を慮り、三つ子の一名に、年中必要な生活必需品と学習品でわずかな不便も感じさせないように保障してやることについての具体的な処置もお取りになった。（二六頁）

何故金正日は、幹部も無理解な三つ子の優遇を始めたのか。それは金日成がある日、突然こう言い出したからであるという。

四つ子出生についての報告を受けられた偉大な首領様は、(八四年)一〇月四日の夕方頃、保健部の一責任幹部を電話で呼びつけられた。オボイ(親たる)首領様は四つ子が産まれた事実をお尋ねになり、喜び溢れる語調でこのようにおっしゃった。「まったく、慶ばしいことだ。三つ子がたくさん産まれることは、国が興隆する兆候だと喜ばれるのだが、四つ子が産まれるとは、どんなに好ましいことか」(二五頁)

『朝鮮時報』はこの間の事情を伝えて、八四年八月二〇日、次のように報じた。金日成主席は、わが国で三つ子がよく生まれるのは国が繁栄する前兆だと大へん喜ばれ、かれらに贈り物をするのがよいとのべた。主席の意をくみとつた金正日書記は、昨年(八三年)五月、関係部門の担当者に三つ子への贈り物をよく検討し、三つ子が成長しても一生記念となり、代を継いで受け継ぐ貴重な家宝となるりっぱなものを作らねばならないと強調、その具体的な内容と形式にいたるまで細かく指示した。こうした作られたのが、護身と幸福のシンボルである銀粧刀と金の指輪である。銀粧刀と金の指輪には、三つ子を象徴する三つのルビーがうめこまれており、三つを合わせる⁽¹⁾と生年月日がわかるようになって⁽²⁾いる。

前掲『福をいただいた三つ子たち』では、三つ子への「愛の贈り物」が開始されたのは、七四年八月七日、金正日の指示によるとあるが、根拠がなく、おそらくこれが開始されたのは八四年からであり、検討に入ったのは前年の五月である。これは『福をいただいた三つ子たち』の「一九八三年五月のある日、偉大な首領様はある三つ子の出生の報告を受けられ、我が国で三つ子がたくさん生まれることは国が興隆する兆候だと喜ばれ、三つ子に一生記念になるに相応しい贈り物をやるのがよいとおっしゃった」(三一頁)とあるのが、『朝鮮時報』の記事に合致する。また、八一年刊行の『平壤産院』(外国文出版社)には三つ子の記載がまったくなく、平壤産院が開院した翌年、一

九八一年だけでも一五組の三つ子が生まれむくむくと育った」(二〇頁)という記述も疑わしく、平壤産院に三つ子科が設置され、三つ子特設産院となるのは後のことであろう。

さて、それでは何故金日成・金正日はこれほど三つ子にこだわったのであろうか。その究明には、朝鮮という風土の中で三つ子がどのような位置を占めていたかを探らねばならない。

三つ子表彰の最も古い記事は、新羅に関する記述にまで遡る。

麟徳三年丙寅三月十日、有人家婢、名吉伊、一乳生三子。總章三年庚午正月七、漢岐部、一山級干、一作成山阿干婢、一乳四子、一女三子、国給穀二百石、以賞之。(『三国遺事』卷二、文虎王法敏)

麟徳三年(六六六年)に婢の吉伊という者が三つ子を生み、總章三年(六七〇年)には漢岐部の婢が四つ子を生み、これは三男一女であった。国から穀二百石を与えて賞したという。後文は『三国史記』卷六、新羅本紀第六、文武王十年六月の条に、「漢祗部女人、一産三男一女、賜粟二百石」とあるのに合致する。次に古い記録は高麗のもので、ここに掲げる。

癸卯、三司奏す、溟江渡の女、一産三男、旧例に抛り穀四十石を賜う。命じて五十石加賜す。(癸卯、三司奏、溟江渡女一産三男、抛旧例、賜石四十石、命加賜五十石)、『高麗史』世家卷第十二、睿宗三年八月癸卯条。西曆一一〇八年)

李朝に入ってからのもっと古い記録は、定宗代のものだが、牛馬とともに出てくる。

癸未、前江陵府使李曄、戸牛一生二犢。慶尚道鷄林安康県、李考婢萬月、一乳三男、馬一生二駒。咸陽禾尺、每邑金妻、一生三男、使書雲觀稽古文、申曰、一生三子主太平、一云、不過三年、外国来朝。(『定宗実録』卷二、

元年七月癸未条。西曆一三九九年)

前の江陵府使の牛に一度に子牛二匹が生まれ、鶏林の婢が男の三つ子を産むと、馬にも二匹子馬が生まれた。咸陽の賤民では、邑々の金の妻が男の三つ子を産んだ。書雲觀に古文を調査させたところ、三つ子は太平をつかさどる瑞兆で、三年も経たないうちに(我が国が繁栄し)、外国が我が国に朝貢に来るだろうというのである。⁽⁴⁾これは儒教を国教とする李朝にとって、牛馬に比すべき非儒教的な習俗であるが、前朝より瑞兆として認識されているゆえ、継承するという態度を示しているものと思われる。

以後、英祖四十六年(一七七〇年)五月辛卯条の濟州島の記録まで、約三七〇年間に、三つ子(四つ子も含む)表彰の記録は各朝に枚挙に暇がない。特徴としては、表彰者は身分の低いものばかりで、賤民・兵隊・平民に限られており、士族身分には見られないという点である。つまり、上層階級が下層に賜う恩典なのである。

また、宣祖三十二年(一五九九年)四月辛亥の『実録』の記録では、「変異非常なるも、法典に拠り食物を題給す」と言っており、儒的には怪異であるが、旧例で仕方がないという語調が見られる。なお、法典には三つ子に食料を与えよなどは、どこにも書いていない。あくまで旧例、つまり三つ子瑞兆は新羅に関する記述にまで遡る朝鮮の古俗の一つなのである。

この古俗に関する伝統習俗的な記憶が、ある日金日成の脳裏をかすめたのであろうか。孝行息子の子の金正日はその言葉をのがさず、調査・検討して実行に移したとも思われる。責任幹部たち、該当者たちが無理解だったのは当然であり、この伝統習俗的な記憶は現在の韓国人でさえ、三つ子の娘は美形だ程度的美俗印象のみで、ほとんど民俗としての痕跡を残していないのである。

では何故この恩典を復活したのか。それは恩恵に対する下からの返礼である「忠誠」の実行例を増やし、上からの恩と下からの義のやりとり関係を広範に実践することによって、情（ピエタス）の社会を偽装し、下からの反抗の種を未然に溶解させるところにある。冒頭の三胎子接見などはその好例である。この日八九年一月二十五日、ルーミアアではチャウシエスクが既に処刑されていた。

一九九〇年七月一日の党機関紙では、恩に報いて重労働部門に進んで転職した三つ子姉妹の忠誠を美しく書き立てている。咸興市城川江区域被服工場の一九名の娘たちと朝鮮人民軍の金ボンヒョン所属部隊の二〇名の女性除隊軍人役員が、大興鉱業総合企業所に集団「進出」した「美しい素行」に感激し、殷栗鉱山被服職場の三つ子の三姉妹が、自分たちも同企業所へ行きたいと嘆願したのであった。ちなみに北朝鮮では、「進出」とは「危険度の高い、重労働部門に自ら進んで転職すること」である。さて、彼女らを勇気づけたのは、既に「榮譽軍人」と結婚し、彼女たちの誇りになっていた実の姉であった。なお、「榮譽軍人」とは北朝鮮では、「戦争、危険な建設作業、兵器の爆発などで任務中に重い負傷を負った傷痍軍人」のことをいう。姉は言った。

お前たちが生まれたとき、お父さんお母さんは、我が家庭に配慮下さる偉大な首領様の愛がとても大きく、ありがたくて涙を流した。部屋のかな一杯に贈り物が送られ、道と中央の名のあるお医者様が常にお前たちの傍らに付き添っていたつけ。だからお前たちの名前も党と首領の恩徳に、毎年毎年長く忠誠で報いよと今のように名付けた。（三姉妹の名は恩誠、年誠、忠誠）。それを忘れてはならないお前たちであり、我が家庭ではないのかい。⁽⁵⁾

興味深いことには、ここには九四年から「共産主義美風」と名称の固まるいわゆる「美風」教化の原型が、①重労働への進出②傷痍軍人との結婚と、二種類も複合して、三つ子とともに一幅の教化「画幅」（絵巻）をなすことであ

る。ちなみに「美風」教化のもう一本の柱は、③孤児引き取りと老人保養であるから、三つ子との絡み合いは困難である。③の教化は九二年から集中して個別に始まってくる。

もちろんこれら教化の背後には、世界的な社会主義の崩壊と韓国の北朝鮮に対する経済的優位、外交的優位、つまり資本主義の優位に対抗し、国内の思想的団結を引き締めるといふさらに大きな目的があるのであり、社会政治的命体という有機体国家論も、北朝鮮にとっては資本主義に対抗し得る「優越性」と観念されていることを忘れてはならない。三つ子の幸福とはこの世界の優越性を示す、ひとつの象徴なのである。

社会が一つの社会政治的生命体をなし、人々が互いに助け合い導き合いながら生きる社会主義社会では、国家が社会の全ての成員の生活に対し責任を負います。国家が社会の全ての成員に対し責任を負い、面倒をみてくれることは、資本主義社会に比べ、社会主義社会の本質的優越性の一つです。資本主義社会では人々の生活は個々人の事として自然発生的になされており、ブルジョワ国家は人々が飢えて死のうが構ってくれません。⁽⁶⁾

それゆえに、この教化に沿って人々は互いに助け合わねばならない。首領の恩徳である社会政治的生命をいただいた人民は、重労働の炭坑に自ら進んで「進出」し、あるいは「榮譽軍人」と結婚する。より多くの恩恵を受けた三つ子は、この情の社会主義の「優越性」を保証する幸福の尖兵である。たとえば次のように、韓国は三つ子・四つ子すら幸福にできない道徳的に「落伍した社会」として描かれるのである。

南朝鮮の一出出版物は『父を失った四つ子の凄惨な姿』という説明文を付け、恩華の家の四つ子についての写真を載せたが、飢えにやつれた四つ子を胸に抱いた母の顔に愁いの影がさしていた。……これこそまさに富はますます富み、貧はますます貧しくなる南朝鮮の凄惨な姿だ。……

偉大な首領様がしつらえて下さり、親愛なる指導者同志が輝かせる最も優越した、人民大衆中心の我々（ウリ）式社会主義だけが、全国の子どもの未来、朝鮮民族の後孫万代の永遠の幸福を担保し得るのである。

金日成の死後の世界を射程に入れた、永生する社会政治的生命体という教化のなかで、金正日と宣伝扇動部は永遠の幸福というテーマを追求する。それは三胎子という限られた天賦の者たちから始まり、つぎには全人民へと徐々に推し広げられ、そしてやがて全人民の幸福観を果敢に奪取することになるのである。

(2) 「首領福」と「人民福」——幸福観の奪取

一九九四年三月一九日、北朝鮮では「信念と意志の化身」と称揚される李仁模⁽⁸⁾氏の寄稿文、「我々には首領福があります」が党機関紙に掲載された。

私はその間（北朝鮮帰国後）、祖国の懐に抱かれて暮らしつつ、多くのことに気づきました。その中でも最も強く切実を感じたことは、我が人民が首領福に乗って生まれたというその点です。……ナム（よその国民、よその民族）たちは自分の民族史に真の領袖を一かたも奉れず、曲折を経ていますが、我が人民は天下第一の首領を御二方も奉っているのです、胸を張って暮らしています。それは何と大きな幸せでしょうか。……

私が北に送還されるということが伝わってきたとき、一日ソウルから来たという正体不明の一要員が訪れ、以北に帰るのをもう一度よく考えてみたらどうかと言いつつ、今モスクワも倒れ、社会主義も皆無くなっているの

に、以北にどうしても帰らなければならぬのかと言いました。……

(北朝鮮に帰国して) 限らない人波と花の波の中で流したその日の涙は、峻厳な情勢の中でも偉大な愛の力で死者を生者に生き返らせる首領さまと將軍に対する感謝の涙だったと思います。そのときすでに我が平壤の社会主義は、ソウルの資本主義に勝ったのです。⁽⁹⁾

精神主義的な信仰告白文に似たこの手記の宿す「宗教教化」の種は、「『首領福』に乗って生まれてきた」という言葉である。朝鮮語では「生まれつき」というとき、「taeo nada」(乗って生まれる)というが、何に乗ってくるかは示されない。中世朝鮮語では、漢語の「賦命」(自己に与えられた運命)を「myeongwi ta nanni」(命に乗って生まれること)と訳しているが、現代朝鮮語ではこの「命」は無く、ただ「乗って生まれる」(生まれつき)といい、乗り物は示されないのである。

この教化の卓抜にして新鮮なところは、この語に乗り物を挿入し、それを「首領福」としたところにある。人民は皆、「首領の福に乗って(この世に)生まれてくる」のである。人民は首領からこの世に生まれてからのちに社会政治的生命をいただくのみでなく、生まれるその瞬間に首領の福に乗ってこの世に生まれいずるのである。それは何も大きな幸せであり、偉大な愛の力であることか。その首領を戴くことだけで、「ウリ(我々)式の社会主義」は資本主義に打ち勝つのであり、ソ連や東欧などナム(よそのもの)たちの社会主義の崩壊など関係ないと、教化するのである。

その後、三月三十一日からの全党細胞秘書大会、四月六日から八日の最高人民会議第九期第七次会議を経て、十五日の金日成誕生日をめざし、「首領福」教化は次第に高まっていった。四月一三日には、第一二次春の親善芸術祝典が

開かれ、万寿台芸術劇場と烽火芸術劇場で公演が行われ、「説話と歌『首領福を歌おう』」に出演した在中朝鮮人芸術人たちは、一世代に御二方の首領を高く奉る我が民族の限りない栄光と幸福を切々と歌った⁽¹¹⁾のであった。

誕生日当日の機関紙社説では、「首領と人民の渾然一体」の語を一九回反復し、「渾然一体」を五回繰り返し、次のように述べた。

首領福に乗って生まれてきたならば、首領に忠孝を尽くさねばならない。首領に対する信念と革命的義理、これは自分を革命家として育ててくださり、真の生を抱かせてくださった首領のその恩徳を永遠に忘れない熱い良心であり、絶海の孤島と断頭台の上でも首領に立てた誓いを捨てない固い革命的志操である。

同月二四日には、朝鮮人民軍のなかで「首領福」の教化が、読報と実効会の教化法⁽¹²⁾で行われていることを告げ、「信念と意志の化身李仁模同志が書いた文『我々には首領福があります』に対する読報と実効会も組織させ、『首領福と我々の尊厳、我々の幸福』という題目を与え、軍人たちの中で討論も繰り広げさせた⁽¹³⁾」と述べ、「首領福」の語を八回反復した。

北朝鮮の物語教化の浸透過程は、機関紙の二面か四面にキーワードが突然登場し、それが一面社説に移り、反復され、次に各地の実践状況を伝え、外国人や韓国人や在外朝鮮人がそれを賞賛している有り様を告げ、朝鮮人民軍のなかで教化が行われていることが報じられて、キーワードが歌になり放送で歌われて最高潮となるのである。

六月二〇日機関紙では、「福をいただいた人民」と題し、「中央人民委員会の一室に行くと、我が国で輩出された受勲者たちの名簿を記憶するコンピューターがある⁽¹⁴⁾」と告げ、金日成勲章から功労メダルに至る受勲者がすなわち「首領福に乗って生まれてきた」実例であることを示した。

七月六日の社説は金日成首領死去の二日前のものであるが、あたかもその死を前提にしているかのごとく、「人民福」という語が初めてあらわれる。またこの社説では、「領導者と人民の渾然一体」という語が一九回、「親愛なる指導者金正日同志と我が人民の渾然一体」は一回、「首領と人民の渾然一体」は四回、「首領福」は七回、「人民福」は三回出て来る。ちなみにマインド・コントロールでは、このような反復をサイキック・ドライブと呼ぶ。

今日わが国では、全人民が首領福に乗って生まれてきたといい、親愛なる指導者金正日同志が人民福を受けているとおっしゃっているのは、まさに領導者と人民との信頼関係がいかに絶対的なものになっているかということを示してくる。……我が人民が享受している福のなかでも最も大きい福が首領福である。全党員と勤労者たちは首領福に乗って生まれてきたことがいかに幸福で誇り高いことであるかを心臓深く刻み込まなければならぬ。⁽¹⁵⁾

「人民福」の説明は、金日成死去後、八月三日に金正日の口吻をもって次のように語られた。

親愛なる指導者同志はその日、我が人民は首領福に乗って生まれてきたが、我々幹部は人民福に乗って生まれてきたのだとおっしゃり、真に感激のこもったお言葉をたまわりました。

『我々幹部が人民福を受けたのは、みな首領さまの御徳です。首領さまは我々に大いなる政治的信任を施され、党と国家の重要な職責で働くようにして下さり、人民たちを教化され、首領を知り党を知る立派な人民に育てられました。我々はこのことに対し、永遠の大いなる矜持で心中深くとどめねばなりません』……

御方は真に敬愛する首領さまに対する忠実性の化身であらせられ、人民とあらゆる苦しみと悲しみを共に分かち合い勝ち進む、強い渾然一体のオボイ（親）⁽¹⁶⁾であらせられるのです。

そして、八月一四日機関紙の「正論」には「首領福」を語りつつ、後に拍車のかかる「金日成イコール金正日」教化が、「金日成同志は金正日同志であらせられ、金正日同志は金日成同志であらせられる」という形で初めて登場する。

以上よりこの教化は、次のように設計されていたことが明らかである。金日成の死去という時点をはさんで、九四年初頭より「首領福」、つまり朝鮮人民は生まれながらにして金日成首領の福を賜っているという教化を始め、金日成死後に恩義感の薄れるのを防ぐ。また「社会政治的生命体」論を理論的主柱として「首領と人民の渾然一体」を強調する。金日成死後には「首領福」の返恩として、金正日が人民から「人民福」をもらい、「渾然一体」の永遠の生命体のなかで金正日は金日成に等しい存在として入れ替わる。

それでは、この「首領福」「人民福」という福観念の起源は、どこに求めることができるであろうか。それを示すのが、次の八月二四日の機関紙、「正論、偉大なる渾然一体」である。ここでは「渾然一体」が一回、「首領福」が二〇回、「人民福」が一四回、「偉大な領導者」が三回繰り返されている。

我々はもう一度、去る六月にあった出来事を思い返してみよう。親愛なる指導者金正日同志はその日もイルクン（幹部）たちに我々の特出した渾然一体について次のようにおっしゃった。『いま我が人民は誰もがみな首領福に乗って生まれてきたといっています。僕はこのような良い人民を見ると、人民福を受けているという思いを禁じ得ません』。領導者は人民福を受けている。……

人類史のあらゆる頁を漁ってご覧なさい。しかしそのどの時代、どの国の辞典にも、《首領福》《人民福》という語彙を探し当てることはできないでしょう。……

福に対してかように渴望しつつも、過去せいぜい五福のようなものを最上の理想と見なしていた我が人民が、労働党時代になって初めて、首領福と人民福の結合こそ萬福の源泉であるということに気づいたのである。¹⁸⁾

「五福」とは『書経』洪範にある、「五福、一曰寿、二曰富、三曰康寧、四曰攸好德、五曰考終命」のことであり、儒教の用語である。「洪範」とは治世の要諦として中国古代神話の禹王が天帝から授けられた九条（「九疇」）であり、長寿、富裕、無病息災、道徳を樂しむ、天命を全うするの五つを指している。中国道教の方では、五福に長寿が含まれているので、これを儒教より採用し八戒（八つの戒律）に適用したという。¹⁹⁾つまり「首領福」「人民福」は儒教の五福が根底にあり、それに添加する形で発想されるという点で、北朝鮮のこれまでの物語教化、「忠誠、孝誠」や魂の魂の発展形である「社会政治的生命」などと同様の儒教を根とするキーワードによる教化なのである。これは同文中の次の一節の如く、「崇高なる人民觀を身につけられた親愛なる指導者同志だけが、歴史上初めて思いつかれ語られた偉大な哲学的名言」なのであり、「社会主義を護れば福であり、捨てれば禍であるという真理を雄弁に確証してくれている」のである。翻れば、金正日の頭に朝鮮の古俗や儒教のキーワードを注入したのは一体誰なのであろうか。少なくとも筆者には、儒教の漢文教育を受け、中国の思想と朝鮮の歴史に詳しい、革命第一世代の人物であろうと思われるのである。

九五年五月一日、朝鮮労働党中央委員会は四月三〇日決定の「朝鮮労働党創建五〇周年に臨んでの党中央委員会のスローガン」を発表した。羅列されたスローガンの中に我々は次の二節を見るのである。

偉大な首領金日成同志は即ち偉大な領導者金正日同志であり、偉大な金正日同志は即ち我が党である。……
代を継いで享受している首領福を心臓深くとどめ、領導者の思想と領導に最後まで忠実であらう。²⁰⁾

五月一二日には、金正日の語った「首領中心論」を、「首領中心論というものを一言で言えば、首領が社会政治的集団の生命の中心として人民大衆の運命開拓で絶対的地位を占めており、決定的な役割を果たすという理論である」と定義し、これを核として、「金日成イコール金正日」教化と「首領福」教化は次のように金正日崇拜へと収斂されたのであった。

今日我が人民は敬愛する金正日同志を党と革命の陣頭に高く奉り、代を継いで首領福を享受する、矜持高く幸福な人民として、誇りを轟かせている。偉大な金正日將軍さまは思想も領導力も徳性もオボイ（親たる）首領さまそのままの、もう御一方の金日成同志であらせられる。今日我々の社会主義がそのいかなる環境のなかでも勝ちに乘じて進んでいる（乗勝長駆）のは、まさに我が党と革命の首位に偉大な金正日將軍さまを奉じているところにある。⁽²¹⁾

もはや、この教化の目的は誰の目にも明らかであった。金日成の死後もこの全体主義体制を維持するためには、金正日は北朝鮮社会政治的生命体の中心であり、人民の幸福を握る「首領」でなければならぬという命題が、北朝鮮の全大衆教化を貫流していたのである。

第三章注

(1) 本紙政治報道班「偉大な首領金日成同志は朝鮮人民軍第二次社労青員大会に参席した三胎子軍人たちを接見なさつた」『労働新聞』一九八九年二月二六日、一面。

(2) 「金正日書記と社会主義建設」『朝鮮時報』一九八四年八月二〇日。鐸木昌之、前掲書、一九五〜九六頁より再引用。

(3) 『福をいただいた三つ子たち』金星青年出版社、一九九三年一月一〇日刊、三三頁。

(4) 歴史上、中国に対する被朝貢国であった朝鮮には、「朝貢コンプレクス」と呼ばれるべき意識が存在する。それは、強大国に貢ぎ物を贈り、臣従し続けたことを屈辱と意識し、自国もいつかは繁栄して、まわりの国々から貢ぎ物をもたらすようになりたいという願望である。このコンプレクスは現在の北朝鮮にも確実に残っており、各国の友好人士が訪れる度に携えてくる物品や金日成・金正日への土産物を貢ぎ物だと「主体的に」解釈し、妙香山に国際親善展覧館という貢ぎ物展示館を建設し陳列した。この館の隠された記号は、次の一文に明らかである。

朝鮮の名山妙香山に位置する国際親善展覧館を訪れた人々は、民族の国宝として大切に保管展示されている数多くの贈物の前で感嘆を禁じ得ない。……

振り返れば半万年の悠久の民族史で、我が国がいつこのように多くの贈物をもたらったことがあつただろうか。他の国から贈物をもたらすことはさておいても、膏血と血の汗の染み込んだ《封物》や《進上物》を諸大国に奉り捧げることのみが、過去弱小国としてわが国が強いられた恥辱の境遇であつた。

(ユン・ケグン)「偉大な御名に輝く我が国」、『労働新聞』一九九五年二月二五日、三面

なお、国際親善展覧館については、『国際親善展覧館』(外国文出版社、一九八二年刊)参照。

(5) 「誇ろう、殷栗の乙女、三つ子たち——大興鉱業総合企業所へ進出を嘆願した殷栗鉱山被服職場の柳恩誠、柳年誠、柳忠誠の三つ子についての話」、『労働新聞』一九九〇年七月一日、三面。ちなみに、文中の三姉妹は一九歳であり、生まれ年は逆算すると一九七一年になる。前掲「福をいただいた三つ子たち」では、三つ子誕生時の医師派遣は、七九年一〇月からであり、贈り物開始は七四年八月七日とあるから、本引用文とは全く一致しない。筆者は両者どちらの記事も、長い年月をかけたことを示すための偽装であると考ええる。

(6) 金正日「人民大衆中心の我々式社会主義は必勝不敗である」(朝鮮労働党中央委員会責任幹部たちとの談話、一九九一年五月五日)、『労働新聞』一九九一年五月二七日。また、『勤労者』第六号、通巻五九〇号、一九九一年六月三〇日刊に転

載。

(7) 本紙記者、金ソンナム「恩恵の胸で福をいただいた四つ子」『労働新聞』一九九一年一月一日。

(8) 李仁模氏は、従軍記者として朝鮮戦争に従軍。五二年「バルチザンとして」韓国側に逮捕され、八八年に釈放されるまで服役。以後釜山大学付属病院に入院、韓国南の養老院を経て、南海岸の農家にあずけられたという。北朝鮮側では「非転向の従軍記者」として九二年二月の南北首相会談以来繰り返し送還を要求していたが、九三年三月一九日、韓国側が無条件送還に応じて四一年ぶりに北朝鮮側に引き渡された。以上、『読売新聞』、『朝日新聞』一九九三年三月一九日夕刊参照。釈放後の状況は『労働新聞』一九九四年三月一九日付け、二面の手記「我々には首領福があります」参照。この手記によれば、逮捕は五〇年、釈放は八四年になっており、上記日本の新聞とは差異がある。李仁模氏は帰国後、非転向を貫いた「信念と意志の化身」として称揚された。

(9) 李仁模「我々には首領福があります」『労働新聞』一九九四年三月一九日、二面。

その後、李仁模を「首領福」の宣伝素材とし、同年一二月、辺ソソリム著『金正日將軍さまと李仁模』（平壤出版社、一九九四年）が出版された。同書に、「結局私の信念というのは、首領福を身につけた私が、身は引き裂かれ、はじけようとも、捨てることのできなかつた人間的な道理でした。」（二〇〇頁）と、ある。

(10) 『小学諺解』（萬曆十五年丁亥四月李山海跋、宣祖廟本）外篇卷五、二十六丁右。なお漢語「賦命」の日本語訳は、宇野精一『新釈漢文体系、小学』（明治書院、一九六五年初版、一九七八年一七版）二六一頁、遠藤哲夫『中国古典新書、小学』（明德出版社、一九六九年）四三頁参照。

(11) 四月一三日発朝鮮中央通信「万民の讚歌、切々たる祝願―第二次春親善芸術祝典聯歓公演行われる」『労働新聞』一九九四年四月一四日、五面。

(12) この教化法については、本稿「はじめに」注（4）を参照。

(13) ドン・キユン「首領福を一時も忘れない―朝鮮人民軍、安ビョンセ同志所属部隊軍人たち」『労働新聞』一九九四年四

月二十四日、一面。

(14) 「福を受けた人民」『労働新聞』一九九四年六月二〇日、四面。

(15) 社説「領導者と人民の渾然一体の威力を一層しっかりとつき固めて進もう」『労働新聞』一九九四年七月六日、一面。

(16) 本紙記者、梁スン「渾然一体の偉大なオボイ（親）」『労働新聞』一九九四年八月三日、三面。

(17) 李ヂヨンテ「正論、偉大な領導者を奉り、天地の果てまで。太陽は高く昇っている」『労働新聞』一九九四年八月一日、三面。

(18) 本紙記者、金ヂヨンウン「正論、偉大な渾然一体」『労働新聞』一九九四年八月二四日、二面。

(19) 楠山春樹「道教と儒教」(『道教』第二卷「道教の展開」、平河出版社、一九八三年)、第二章「道教戒に見える儒教思想」七八〜八〇頁参照。

(20) 朝鮮労働党中央委員会四月三〇日「朝鮮労働党創建五〇周年に臨んでの党中央委員会スローガン」『労働新聞』一九九五年五月一日、一面。

(21) 朴ナムヂン「人民大衆の自主偉業遂行で首領が占める絶対的地位と決定的役割」『労働新聞』一九九五年五月一二日、二面。

(以下、次編に続く)